

如来の作願をたずぬれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首としたまいて 大悲心をば成就せり
(聖典五〇三頁)

ひとえに親鸞一人がためなりけり

第4組 極楽寺住職
巖城 孝憲
text by Takanori Iwaki

もう30年以上も前のことになるが、北海道教研（第5期）の研究集会で、仲野良俊先生から言われたことであるが、『教行信証』「信巻」に、

涅槃の真因はただ信心をもってす（聖典二二三頁）

とありますが、宗祖が「真因」という言葉を、ほかに使っておられる箇所がないか、調べてくるように。来月までの宿題です」と語られたことがあった。先生は、「因と縁（原因と条件）を、仏教は非常に厳密に区別している。決して混乱してはならん」と、つねづね語っておられた。信心でたすかるのか、念仏でたすかるのか、という縁（条件）の問題とすることなく、真因（真の原因）とあるのは自己存在の内因の問題であると、問題提起をなされたのであらうと思われる。

仲野良俊先生は、またある時、次のように語られたことも、忘れられない言葉としてしばしば思い出される。「宗祖のご和讃に、

如来の作願をたずぬれば 苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまいて 大悲心をば成就せり（聖典五〇三頁）

とありますが、皆さん、意味がお分かりですか？ 実に深いことを見事にうたっておられる和讃です」と言われた。当時の私としては、意味は一応分かっているつもりであったが、先生からのこの問いかけが、私にはずっと忘れられない問いとなっていた。

宗祖晩年の「自然法爾抄」には、他力回向の世界が簡潔に表現されていて、非常に深い意味が語られている。最初は、次のような不思議な文が置かれている。

獲の字は、因位のときうるを獲という。得の字は、果位のときにいたりてうることを得というなり。名の字は、因位のときのなを名という。号の字は、果位のときのなを号という。

(聖典五一〇頁)

この文の意味はなかなか分かりにくい、ある時教えられたことは、衆生にとっての信心獲得の事実は、如来にとっては名号成就の事実であり、表裏一体の関係にある。しかし、単にそれだけではなくて、法として確立した名は、十方衆生の自覚と救済として確立しているが、名を因として、果としての号が届けられるのは、我一人の具体的な存在においてである。名号の成就ということは、もちろん十方衆生に成就するのであるが、まず私一人において成就する。そのことを、「名は因位であり、号は果位なり」と言われたのである。古いユダヤの言葉に、「一人を救う者が世界を救う」という言葉があるという。汝一人を、決して見捨てない。一人を見捨てない者が世界を救う者である。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり

(聖典六四〇頁)

名は、「親鸞一人がため」、名号として成就する。如来にとっての名号成就の事実は、衆生にとって信心獲得の事実となる。この往還二回向によって、他力の救済が具体化されているのである。如来の作願によって如来回向に依らなければどこにも救いはない凡夫の私一人が見定められているのである。

世親菩薩が、「世尊よ、我一心に尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず」と表白された「我一心」としての信は、有漏百パーセントの自己が見破られ続ける無漏の智慧そのものである。信心でたすかるなら、信心が縁になり、たすかる我が別に有ることになってしまう。そうではなくて、信心が涅槃の真因であるということは、信心が我となるのであり、我一心としての自己の主体の確立が深く語られている。「如来の大悲は、同体の大悲」と言われ、「如来きたりて我となりたもう」と言われる。信心によって救われるのではない。信心を得たことが救いなのである。